PF における放射光構造生物学のウシミツドキ

神谷信夫（大阪市大・院理）

国語辞典で「丑三つ時」を引いたら、現在の午前２時ごろとある。怪談話に出てくる「草木も眠る…」の丑三つ時であるが、私にはどういう訳か、眠っているのは草木ではなく、秋祭りの後に皆で雑魚寝している人達の姿が浮かぶ。もっと近づいてその顔をよく見ると、今から 40 年ほど前の日本の X 線結晶学者達のようである。有機物の解析がかなりルーチン的に進むようになった時代のようで、重原子法とか直接法とか、難しそうな寝言が聞こえる。タンパク質の解析を始めた人達は、チトクロム c や SSI、インシュリンはムニャムニャなどと言っている。若手の中には Cc0 と叫ぶ人もいる。しかしまだ放射光の寝言は聞こえない。ハッと目が覚めたら、昨年ノーベル賞に輝いたリボソームの論文に向かってうたた寝をしていた。

その計画･建設期を経て､PF が立ち上げから利用へと進んだのは 1980 年ごろである。私は 1983 年から２年半ほど所属して､安藤正海教授のもとで BL6A の建設に係わる仕事をさせていただいた。私がそのころ考えていたことと、その後の経過、自由電子レーザーが目の前に現れ､夢の中ではちょうど１日経過したらしい新しいウシミツドキについて述べてみたい。